

# 彌生の人秋播稿

17-3



保存用

JOBK  
\*17.3.0-\*

資料室

交樂齋 四三橋畔

◇てま日す刺めゝとの後最後に英米け貫め進◇



# 乍憚口上

皇軍の向ふところ恰も日月の照らすが如く、新嘉坡すでに陥ち、敵のあるところ悉く灼き盡されんとする烈々の有様、まことに有難き國威を拜しては唯々涙に咽ぶばかり、御同慶に堪へざる次第でございます。就きましては當座に於きましても本來の使命に鑑みまして愈々職域御奉公の一途に邁進いたしまして此度は殊さら堂々の名狂言を連らぬるを始め、茲に大東亞戰爭の爲め尊き礎石と爲られたる我忠勇の戰歿將兵諸氏の靈を弔はんとして、特に「忠靈」なる一幕を謹んで新作上演し、皆様と共に感謝の一端を捧げたいと念願いたす次第であります、此外上演種目の全般に互つて出演の太夫、三味線、人形連中に於ては唯々熱演に次ぐ熱演を以て聊か奉公の誠をいたしたいと存する次第でございます。尙又此度は兼ねて御最眞を蒙り居ります鶴澤叶儀お勧めに預りまするまゝ二代目鶴澤清八名跡を襲名いたし愈々奮勵いたしますれば何卒當座御引立の御餘光を以て相變らず御指導の程を御願申上げ奉ります。

昭和十七年三月二日

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十七年三月初日

初日 午後二時 開演  
平日 午後二時半 開演  
(午後八時半終演豫定)

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢  
(二階座席三十錢上り)  
二等席 御一名 金一圓五十錢  
三等席 御一名 金六 十 錢  
(各等入場税別)

一等御座席 是五日前より  
一等椅子席 是五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 專用電話 南 〇四七壹番  
一般御用 電話 南 〇三〇三番  
南 〇三七八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

# 彌生の形浄瑠璃

演出總形人・線味三・夫太

三 月 一 日 初 日

初 日 午 後 二 時 開 幕  
 平 日 午 後 二 時 開 幕  
 (午後八時半 演終豫定)

第一 菅原傳授手習鑑  
 道行戀の重荷

第二 伽羅先代萩  
 御殿忠義の段

第三 夕ぎり伊左衛門曲輪璋  
 吉田屋の段

第四 攝州合邦辻  
 合那住家の段

中部軍報道部御後授  
 觀世委員會京作・山村若子撰附  
 西亭脚色並作曲・村田芳生舞臺照明  
 陸軍記念日に因みて

第五 忠靈  
 一 幕

第六 繪本太功記  
 尼ヶ崎の段

◇幕間に大東亞戰爭ニュース上映仕り候◇



## 人形役割割

|      |       |       |       |      |
|------|-------|-------|-------|------|
| 妹娘   | 姉娘    | 時世君   | 荊屋姫   | 櫻丸   |
| おもん  | おふみ   | 君     | 姫     | 丸    |
| 桐竹紋司 | 桐竹紋太郎 | 吉田多三郎 | 吉田榮三郎 | 吉田玉幸 |

飴の金、其品々は往て買うたり。拙者が自慢で賣弘める  
 櫻飴を買はつしやい、櫻飴く櫻々と己が名を云へども  
 包む煩かむり、小袖染色身に軽きかるい身成ど忠義は重  
 い今年于支の牛飼の櫻丸はいつぞやより加茂の川浪立出  
 て時世の君を姫君に漸と廻り逢ひ、一日二日は我家にも  
 忍ぶに何と菅原の伯母君頼み参らせんと行くは車の供な  
 らで跡と先とに打荷ふ飴の荷箱の片く御二方を入れ  
 参らせ浮世を土師の里へとて飴のとりに賣りて行心遣  
 ひぞせつなけれ、都をば出ても道はあやなくて御香の宮  
 居に明渡る道は芹川淀も越へ誰かは何と石清水、箱を開  
 けば推高き姿あらはに荊屋姫暫らく拜む日の陰に目なれ  
 ぬ山や知らぬ里思ひなくてぞ見まほしき、ノウ宮様と走  
 り寄互ひに顔を見かはしてちぎりし今の閨の内宵よりし  
 めてぬる夜さは月が出るやらくもるやらヲ、兎にも角に  
 も我れが身は今賣る飴の如くにて笠に覆へる日かげの身  
 いつかとけなん心ぞと御仰せに櫻丸、ア、イヤ飴は飴で  
 もあめが下をしろしめす御瑞相ソモく飴は神武飴逆こ  
 ちもしなるて嬬ちや嫁等がもみの襷をしんどろもんどろ  
 かけてしんどろりもんどろりとねりやりましたを買ふな



ら今じゃ〜と賣り聲の折しも爰へ二人連、枕取る手に  
 寝てとく帯のいかいお世話結ばぬ夢を覺せとや、ヨイヤ  
 ヨイ〜よい世の中に行手の森にやみくらき惜や都の菅  
 丞相筑紫へ流され給ふ故津の國安井に風待しておはしま  
 するはいたはしと所縁と知ず告て行く、跡の驚き悲しみ  
 に小かげを轉び出給ひ、ナニ道眞は左遷とや父上安井に  
 ましますとやせめてお顔が拜みたいどうぞお船の出ぬ先  
 に逢せてたも櫻丸、頼む〜もしどろにてわツと斗りに  
 泣給ふ、聲をも人に知らせじと手ばしこく又忍ばする餘  
 賣が片手に太鼓片手に撥聲おかしくも拍子取りこんりや  
 〳〵コリヤ〜らつばの笛に紛らして夫より道を横切れ  
 に一荷の涙荷ひ行、先はいづくぞ津の國の安井の岸の安  
 からぬ思ひ重ねる哀れさよ。



御殿の段

切竹本重太夫

豊澤廣助

政岡忠義の段

竹鶴本重部太夫  
野澤伊重部太夫  
割野澤勝達平

人形役

|   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|
| 妻 | 妻 | 妻 | 鶴 | 一 | 乳 |
| 沖 | 榮 | 八 | 喜 | 子 | 母 |
| ノ | 御 | 代 | 千 | 政 | 岡 |
| 井 | 前 | 沙 | 若 | 松 | 岡 |
| 桐 | 桐 | 桐 | 桐 | 吉 | 割 |
| 竹 | 竹 | 竹 | 竹 | 田 | 野 |
| 紋 | 門 | 龜 | 門 | 紋 | 澤 |
| 司 | 造 | 松 | 次 | 之 | 勝 |
|   |   |   | 助 | 五 | 達 |
|   |   |   | 郎 | 郎 | 太 |
|   |   |   |   |   | 平 |

伽羅先代萩

御殿の段 政岡忠義の段

人口に膾炙されて居る點でも、この淨瑠璃は今日流行の曲目中屈指の作であります。伊達騒動を脚色した戯曲の中では最も有名な作品で、作者には松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の名が見え、天明五年（二四四五）江戸の結城座の勾欄にかゝつて居ります。

全編九段仕立て、第一が舟岡山、躑躅山、第二が伊達義綱上屋敷門外、第三が貝田屋敷、第四が浮世渡平住家、豆腐屋、第五が近江堅田浦、道行、第六が御殿、第七が明衡屋敷の上使、第八が定倉屋敷、第九が對決になつて居り、中にも六つ目の竹の間から政岡の飯焚き、千松殺しが有名なことは云ふまでもない。

梗概

奥州五十四郡の城主伊達義綱は江戸の吉原の傾



城高尾太夫に溺れ、國政を顧みない所から、奸臣仁木彈正はじめ悪人一黨は公儀へも憚りありと義綱を隠居させ、幼君一人のお家横領を企て、居た。

幼君の名は鶴喜代君と云つた。乳母政岡は幼君を守つて居たが、彈正はじめその一黨の奸策は幼君の身に迫つて居た。幼君毒殺の計が着々とすゝめられて居るのを政岡は知つて居た。それ故、幼君のたべ物もすべて御殿で自ら炊いて差上げて居た。もう一時も油斷のならない状態だつたのである。

政岡には一子千松と云ふものがあつた。千松は鶴喜代君のお相手役として御殿へ上つて居た。

今日も御殿で千松が、侍の子はひもじいめをするのが忠義、食べる時は毒でも何でもお主の爲にはたべる、と云ふのを聞いて我が子ながら健氣なものよと涙ぐんだのであつた。

政岡がいつもの様に幼君の御膳を拵へて居る間

千松は雀の唄を歌つて幼君の御機嫌をとつて居た。縁先に出した雀の籠には親雀が餌をはこんで居る。これを見た鶴喜代君は、雀がうらやましくてならなかつた。そして又、御膳の残りを頂く狎がこの上なくしあはせに見えるのだつた。政岡はこの様子を見るにつけ、聞くにつけ若君のお身の上に涙をしぼる他なかつた。

やがて御膳も出來た。千松の毒味に喜んで握飯をたべる鶴喜代君の心根を政岡は勿體ないものと思つた。

折から梶原様の奥方御入りなり、と云ふ聲に、政岡はこれを訝しんだ。何はともあれお通し申せと千松にはいつもの事を云ひ含めて奥へやつた。やがてしとくと一と間へ通つたのは榮御前、政岡はじめ沖の井八汐もこれを出むかへた。

榮御前は夫梶原に代つて鶴喜代君の病氣見舞に來たのだつた。それに持參の菓子折は頼朝公より

の下され物と云ふのだつた。

榮も八汐も曲者、彈正一味の何を企んで居るか知れない人物だつた。榮持參の菓子折を八汐は引取つて早速鶴喜代に獎め様とした。何と云つても頑はない幼君はこれに手を出さうとするので政岡は押し止めた。

傲慢な榮は、頼朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて食べさせぬ、是非ともこの榮が食べさせる、と強引である。政岡もこれにはたと當惑した。頼朝公の仰せと云つて押つける榮に何と云つてよいか返答に窮してしまつた。

其處へ奥から走つて出た千松は、その菓子欲しいと云ふなり摺んで口へ入れた。八汐も榮も驚くうちに千松は七轉八倒、果してそれは毒を仕込んだ菓子だつたのである。八汐はすかさず千松の首筋引寄せて懐劍で突きさした。そして、お上へ對し慮外の千松この通りと、なぶり殺しにするのだつた。

政岡はぢつと堪らへて居た。これでもか〜と云ふ八汐に又別の奸計のあるのを見抜いて居たからである。

一同を別間へ引取らせた榮は政岡に事のたくみの始終を明し、悠々と歸つて行つた。榮は政岡がてつきり同腹中の者と思ひ込んだのである。それは、最前八汐が殺した千松は實はとりかへ子の鶴喜代だと思つたのであつた。

榮を見送つた政岡ははじめて我に返つた。そして慘らしく殺された千松の死骸を抱きしめ、その忠義を讃め、又幼君の御武運を守る神佛に謝した我が子の殺される様を涙一つ見せず堪へた政岡の心情は忠義の塊りであつたが、今は母として前後亂れて泣き叫ぶ政岡だつた。

(佐和利) 御殿の段

ドレこしらへうとかい立つて、かたへに飾る黒棚より取出す錦の袋物風爐にかけたる茶飯釜の、湯の試みを千松に、飲さず茶碗も樂ならで、お末が業を信樂や、いつ

水さしを、炊桶流す涙の水こぼし、心も清き洗ひ米、釜にうつして風爐の炭、直してあふぐ扇さへ、骨も碎くる思ひなり。

そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を固めさず誠に國の礎ぞや、とは云ふ物の可愛やな、君の御爲かねてより覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしい者の手にかゝつても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房連の刃にかゝり、鸚り殺しを現在に傍に見て居る母が氣は、何の様にあらう、どうあらう思ひ廻せば此ほどから、謳ふた歌に千松が、七つ八つから釜山へ、一年待て共まだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬ、と歌の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔を見せる事もある、同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて何の便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰ふなど云ふて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ様な胸窓非道な母親が、又と一人あるものか、武士の種に生れたは果報か因果か、いぢらしや、死ぬるを忠義と云ふ事は、いつの世からの慣習しぞと、こりかたまりし鐵石心、道女の愚に返り人目なければ伏轉び死骸にひつしと抱きつき前後不覺に歎きしは、理り過ぎて道理なり。

吉田屋の段

夕ぎり 伊左衛門 曲輪 樟



くろ  
か  
ぞ

吉田屋の段

伊左衛門 豊竹 和泉太夫

夕ぎり 竹本 伊達太夫

喜左衛門 豊竹 呂太夫

おきさ 竹本 南部太夫

太鼓持 竹本 隅若太夫

叶改め

鶴野澤 清八

鶴野澤 友平

鶴野澤 友平

ツレ 鶴野澤 重造

大近松作の所謂夕霧物として數種ある中で最も完成したものとして名高い「夕霧阿波の鳴門」三卷の上の巻吉田屋はこれ以後の夕霧劇の權輿となり、改作物も種々出たが、その中でも浪岡橋平、淺田一鳥、安田蛙桂合作「浪花文章夕霧塚」(寶曆元年四月||二四一一||豊竹座上場)や、更にこれを雛案した近松半二等の「傾城阿波の鳴戸」(明和五年六月||二四二八||竹本座上場)に對し、原作の面影を多分に殘してゐる著作年代不明の「廓文章」があり(聲曲類纂補遺に安永九年作||二四四〇||と見えてゐる)、これが操芝居にかけられたのが寛政六年五月廿八日(二四五四)からの道頓堀大西芝居で、この興行の時から外題も今日の如く「夕ぎり伊左衛門曲輪樟」と書かれ、以後度々繰返へし上演されて來た。

梗概

時は延寶師走の末の事、今日が嘉例の日取りと

人形役割割

|     |      |     |    |
|-----|------|-----|----|
| 扇屋  | 夕霧   | 桐竹紋 | 十郎 |
| 藤屋  | 伊左衛門 | 吉田  | 玉幸 |
| 吉田屋 | 喜左衛門 | 吉田  | 玉藏 |
| 女房  | おきさ  | 桐竹紋 | 太郎 |
| 禿   |      | 桐竹  | 小紋 |
| 太鼓  | 持    | 吉田  | 兵次 |

て、九軒の揚屋吉田屋の店先は餅搗で賑はつてゐます。

阿波の平大盡が幫間未社に誘はれて此家の門をくぐつた後に、冬編笠も垢張つて、紙衣の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、見すばらしい姿を見せたりは藤屋伊左衛門です。伊左衛門は吉田屋の内を覗いて、喜左衛門宿にか、喜左、喜左……と聲をかけますが、なりに似合はぬ横柄な言葉に怒つた餅搗の若い者は、高箒を持つてうちすへやうとします。

折柄出て来た亭主の喜左衛門は是を止め、笠の内を覗いて思はずも、伊左衛門様か、是は夢か、お久しや……と、紙衣觸りの荒さ氣遣ふ伊左衛門を奥へと招じ入れます。

案内された一間で炬燵に身を暖め、今に變らぬ吉田屋夫婦の志を喜ぶ伊左衛門が、七百貫目の借錢に、惣身が金ゆゑ冷へると云へば、餅搗に大きな金がお入りなされたと夫婦は縁起を喜びますが



其好遇にかかはらず、今に夕とも霧とも噂をせぬを、若しや夕霧は無常の露と消へたのではあるまいかと案じますと、霧様は病中ながら爰へ来て、隣座敷で阿波の客に逢つてゐるとの事でした。伊左衛門は隣座敷を覗き、其様子を怒つて悶へ泣きますが、其所へ病に悩み戀に泣く夕霧が来て、煩ふて疾に死ぬ身であつたとかき口説きます。伊左衛門は萬歳傾城と夕霧を罵りますが、聽ては其眞情も分り心も解けるのでした。

と、此時大勢の手で金箱が運ばれて來ますが、これぞ藤屋の親許で勘當を許し、夕霧の身代八百兩を送つてよこしたのでした。

(佐和利) 吉田屋の段

過ぎし夜すがの連彈を、思ひ出して伊左衛門、腹立まぎれに調子さへ、あはば何して斯してと胸は二上り三下り、今の憂き身も心から、思ひ廻せば奥の間の歌の唱歌に合の手や、可愛男に逢坂の、關よりつらい世のならひそれよ、あの歌で思ひ出す、去年の月見は奥座敷、底意

隈なき夜と共に、飲み明したる大騒ぎ、太夫とおれが連弾で、弾いた時の面白さ、弾くその主は變らねど變つたおれが身の上、あいつが心底あの様にあらうとは、思はぬ人に堰とめられて、今は野澤の一とつ水、ア、いかさまさうじや、戀も誠も世にある時、人の心は飛鳥川、變

るは勤めの習ひじやもの、いつそ逢はずに去んで呉りよア、イヤ〜喜左衛門夫婦が志、逢はずに去んでは此胸が、すまぬ心の中にも暫し、すむはゆかりの月の影むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく、飛立つ心奥の間の、首尾は朽ちせぬ縁と縁胸と心の相の山、間の襖の工合よく明け暮れ戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り我身を俱に襦袢に、引きまとひ寄せとんと寢て抱き締め締め寄せ泣きけるが、申し伊左衛門様、目をさまして下さんせわしや煩うてな、疾うに死る筈なれども、今日まで命ながらへしは、今一度逢はして下さんす、神佛の控へ綱、コレなつかしうは無いかいな、顔は見たうは無いかいなと、ゆり起し〜、抱き起せば取つて突退け、ヤコレそこな夕霧どのとやら、夕めし殿とやら、節季節走りにこなたの様に、暇ではござらぬ、七百貫目の借金負う

て、夜晝かせぐ伊左衛門、こんな時寝ねば寢られぬ、邪魔なされな惣嫁どのと、ころりと轉げて空廚、身に覺えはなけれども、恨みがあらば聞きませう、イヤ〜イヤ〜、寢さしはせぬ〜。

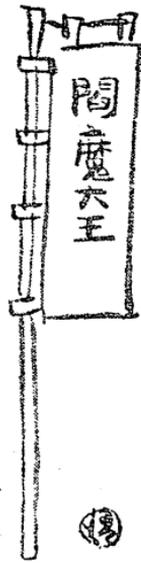
## 鶴澤清八の代々

### ◇初代

本名佐久間清八。文政五年大阪に生る。天保四年三代目鶴澤清七の門に入り鶴澤安次郎と號す。後、鶴澤蟻鳳と名乗り、弘化四年初代鶴澤叶と改名。更らに嘉永元年初代鶴澤清八と再改名し、明治十九年十月四日、六十五才にて歿す。(東京の竹本小清の實父である)

### ◇二代

明治廿三年五月、三代目鶴澤清六の門人として文樂座に入座。二代目鶴澤鶴五郎を名乗る。後、明治廿二年二月、四代目鶴澤鶴太郎と改名し、大正二年正月、更に四代目鶴澤叶を襲名し、以後今日に及んだが、當興行より二代目鶴澤清八を名乗る事になつた。



攝州合邦辻

合邦住家の段

合邦住家の段

中竹本源太夫

鶴澤叶太郎

切豊竹古靱太夫

鶴澤清六

梗概

安永二年（二四三三）二月、大阪北堀江座初演。作者は菅專助、若竹笛射の合作。全曲は上下二卷より成り、上の卷は發端があられの松原毒酒の場、中が高安館、切が繪旨取戻しの場、下の卷は口が天王寺西門の場、切がこの合邦住家の段に分れてゐる。

人形役割

親手合邦 吉田榮三

玉手御前 吉田文五郎

合邦女房 桐竹政龜

浅香姫 桐竹龜松

俊徳丸 吉田玉市

奴徳入平 吉田玉徳

講入中 大ぜい

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。所が如何なる天魔が魅入つたのか、義理ある先妻腹の子俊徳丸に想ひを寄せ、何かと云ひ寄るので俊徳丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の浅香姫と手をたづさへ玉手の親の合邦の庵室へと身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も

俊徳丸の後を慕つて合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門側も踏せぬと、内へ入れやうともしなかつた。然し追に母は女の身の心弱さから、玉手を幽霊と云ふ事にして、幽霊ならば入れても仔細はありますまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歴とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必らず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一間へ連れて行つた。

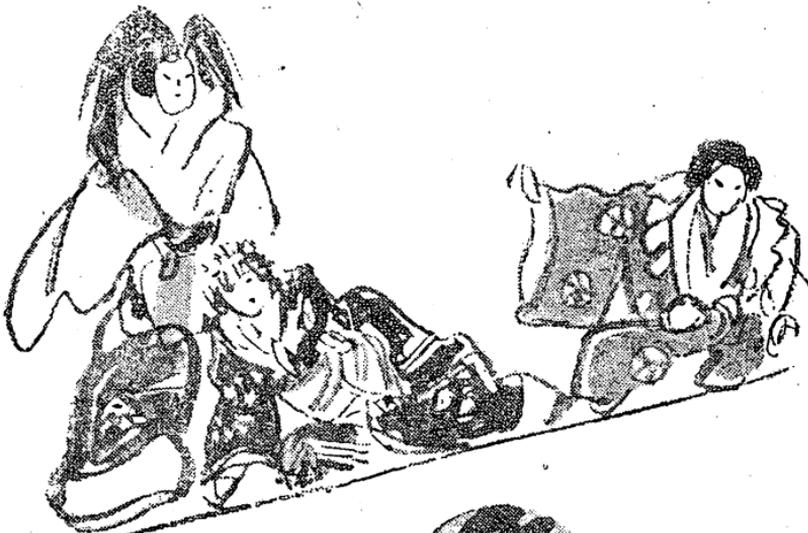
折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつた

が、フト玉手の姿を見付けて、様子をうかゞはんと傍に身を忍ばせて居たが、一間から兩眼盲た俊徳丸が、浅香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念深くつきまとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかしと、既に伴ひ出やうとした。

その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り纏り、入平の意見の言葉も耳に入れず、又しても切ない戀をうつたへるのだつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に悩みながらも「是には深い様子のあること」と自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が奸臣坪井平馬と心を合せ、己が家督が繼がんと、その爲に俊徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ、毒酒に形相を變へさせたの



此処檜下豊竹古靴太夫

相勤申付

豊竹

も、御家督さへお繼ぎなくばお命に別狀なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、そうしてお後を慕ひ参つたのは、此の病を本腹させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して寅の年月揃つた我が血汐を盛つて、俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。その時にはもう玉手の最期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の珠數の輪の中で、玉手御前は一同に見守られつゝ大往生を遂げたのであつた。

(床本) 合邦住家の段(切)

いとしん／＼たる夜の道、戀の道には暗からね共、氣は鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかねつゝ人目をも、忍び兼ねたる頬冠り、包みかくせし親里も、今は心の頼みにて、馴れし故郷の門の口、立寄る後より入平が、御兩所の御行衛、爰とは聞けど奥方の、姿見るより様子もと、戸脇にあつき藪疊、身を潜めてぞ窺ひ居る

かくとはしらで玉手御前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ様かゝ様と、呼ぶは慥に娘の聲、ヤアわりやまだ死なぬか、殺さりやせぬかと、立上りしが心付き、振り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞えぬは、ヤこれ幸ひと素知らぬ顔、かゝ様、かゝ様爰明けてと、叩く戸の音聞き咎めコレ合邦殿、今こな様何とぞ云ふてか、イヤ何共云やせぬそりや空耳であるぞいの。イ、ヤ、空耳かは知らね共ちらりと聞えた娘の聲、ハテ合點の行かぬと立上がる。さう仰有るはかゝ様か、ちやつと明けてくださいんせ、辻でござんす戻りました、と聞いて惻り、ヤアゝゝ、戻つたとは夢ではないか、まめであつたか嬉しやと、かけ出る裾を取つて引とめ、ヤイゝゝ狼狽者、肌はふれてもふれいでも、我子に不義をしかけた畜生、侍の身で高安殿が、助けおかしやる様なければ、何の今迄生存へてろかゝゝ爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すより顯はるゝはなし、親はないと云はしてもある事知つて娘が手から度々の合力金、二人が命を養ふたは、皆高安殿の御厚恩其夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘、譬へ無事で戻つたとて、門ばたも踏まされうか、元來娘は斬られて死ん

だが、今もの言ふたが娘なれや、夫こそ幽霊、そなた氣味が惡うはないか、因縁の深い程、死人になれば恐いもの、必らず門の戸明けまいぞと云ふに女房は、イヤ〜  
 幽霊は愚か、狐狸の化したのでもま一度見たい娘が顔、もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せ、いとし可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一ト目見たいと振切るを、猶引とめて、ハテ扱て惡い合點じやわいの、狐狸か幽霊なればまだしも、もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯、以前は刀を差した役、親の手にかけ殺さにやならぬ、それがいやさに留めるのぢやと、泣かねど親の慈悲心を聞く子や妻は内と外、顔と顔とは隔たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠ぞ哀れる。娘は涙押し拭ひ、門の戸口に口を寄せ、とゞ様の腹立、お憎しみは御尤、これには段々言譯あれど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明けて下さんせと、泣く〜願へば母親は、アレ聞いてか合邦殿、言譯があるといのママ聞いてやつて下さんせ、ハテ娘と思へば義理もかける、幽霊を内へ入れるに、誰に遠慮もあるまいぞへ、アいかさまのう、此世をはなれた者なれば、世間を憚る事もな

い、そんなら早う呼込んで、ソレ茶漬でも手向てやりや可愛や立寄るところはなし、幽霊も嘸ぞひだるかろと、身を背けるは泣く百倍、母は悦び門口の、疾しやおそしと開くる間も、おなつかしやなつかしやと、絶る娘の顔形、前後見つ肌に入れても矢張りほんの娘、嬉しやまめでゐたかいの、然うとは知らいで逆様事、あたいま〜しい百萬遍、弔ひした夜に無事な顔、ひよつと夢ではあるまいかと、抱きしめ〜嬉し泣き、父もほどふる娘が顔、見たさに思はず立寄れど、以前の詞と世の義理を、思へばちやつと飛退いて、手持悪いぞいちらしき、母は漸う心を鎮め、世間の噂にはの、そなたは、アノ俊徳様とやらに戀をして、館を抜けて出やつたの、イヤ不義ぢやのと惡ふ云へど、そなたに限り、よもや〜さう云ふ事はあるまいの、嘘である〜。嘘か〜と箸持つてく〜める様な母の慈悲。面はゆげなる玉手御前、母さんのお詞なれど、いかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事はねた間も忘れず戀こがれ、思ひあまつて打付にいふても親子の道を立て、つれない返事かたい程、猶いやまさる戀の淵、いつそ沈まばどこ迄もと後をしたふて徒は

だし、あしの浦々難波がた身をつくしたる心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の行衛を尋ね女夫にして下さんすが親のおじひと手を合せ拜みまはれば母親も、今更あきれ我子の顔たゞ打守るばかりなり。父はとかふの詞なく、納戸の内より昔の一腰引提出、ヤイ畜生め、おのれにはまだ咄さねど、もとおれが親は青砥左衛門藤綱といふてナ、鎌倉の最明寺時頼公に見出しにあふて天下の政道を預り、武士の鑑と言はれた人、おれが代になつても親のかげ大名の数には入たれど、今の相模入道殿の世に成て侯人共に讒言しられ浪人して廿餘年、世を見限つての捨坊主、此形になつてもナ親の譲りの廉直を立通した合邦が子に、よふもくおのれがやうな女の道も人の道もむちやくちやな娘を持たと思へば、無念で身節も碎けるわい、又高安殿が今日迄うぬを助けて置つしやる御心底を推量するに、もとおのれは先奥方の腰元、後の奥方に引上ふと有た時、強て辭退しおつたを心の正直、懇望で無理やりに奥方になり、ア、手をかけず奥様とも言さずば此仕儀にも及ぶまい、殺さにやならぬやうになつたも皆我業とお身の上を返り見て、親への義理に助けて置しや

るをエ有がたい恥かしいと、思ふ心がけしほどでも有なら、譬へどれ程惚ておつても、思ひ切るに切られぬと云ふ事はないわい、それになんじや其さまになつてもまだ俊徳様と女夫になりたい、親の慈悲に尋てくれとはド、どのほうげたでぬかした、エあつちから義理立て助け置つしやる程生けて置てはこつちも義理が立ぬ、覺悟せいぶち放すと早抜きかける刀の鯉口、母は取り付コレ合邦殿、コリヤ了簡が違ふたくおじひで助けて下さる娘、お志しを無駄にして殺して義理が立ますか、ハテ此上は随分と意見して俊徳様の事思ひ切らし、命の代りに尼法師、いかなる科の囚人も助るは衣の徳、浮世を捨れば死だも同然、どこへの義理も立道理と奥へ指ざし様々と、宥めすかして母親は、我子の膝に膝すり寄せ、聞やる通りの様子なればどの様に思やつてもそなたの戀は叶はぬ程にふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼になつても、十九や二十の年ばいで器量發明勝れた娘、尼になれと勸めるはどんな心で有ぞいの、助たいばつかりに花の盛りを捨てせてかゝれ逆しも黒髪は百筋千筋と撫しもの、刺ねばならぬ此仕儀は何の因果と許りにて縋り付て泣居た

る。娘は飛退き顔色かへ、エ、譯もない事いはしやんすな、わしや尼に成事いやじやく、折角艶よふ梳き込だ此髪がどふむごたらしう剃れるもの、今迄の屋敷風はもつ取置て是からは色町風、随分はでに身を持って俊徳様に逢たらばあつちからも惚てもらふ氣、けがにも假にも尼の坊主のと言ひ出しても下さんすなと、けんもほろゝに取付ず、そふぬかしやモウ勘忍がと父が身構へ、母親はヲ、道理でござんす、腹の立は尤ぢやが、モウ半時かしひて一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見ませう、夫婦に成て長の年月たつた一度のわしが願ひ聞届けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行く父親、母はいぢばる娘の手引立、むりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず淺香姫、一間の内より俊徳の御手を引て忍び出、今の様子を聞に付モウ暫くも此内にお前ほどふも置きまされぬ、何國へなりとお供せうと、手を引立れば俊徳丸、我業滿てず母上に斯迄思はれ參らすも身の罪障とは言乍ら、館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上に、かゝるけやけき姿をばお目にかけなば母上の愛着心は切

もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上は、入平夫婦も尋ね來ば召連れ立退んと宣ふ聲を聞取門口、ア、いや私めは先刻より始終の様子承はる、此所に御座有事里人の尊に聞ばもし敵方へもれては大事、一刻も早く御供せんと、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフなつかしや俊徳様、お前に逢はふ許りにいくせの苦勞物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見たわいなと、すがり賜へば身をすりのけ、へエ、情ない母上様、館にても申すごとく、同氏さへも娶らぬは君子の戒め、まして親子の中々に、戀の色とか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深い俊徳にまだ、罪を重ねよとか、見るめいぶせき此癩病、兩眼しひて淺ましき姿はお目にかゝらぬかや、是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へと涙と俱に恨むれど、ホ、オ、愚な事をおつしやります其お姿も私が業、むさいともうるさいとも何の思はふ思やせぬ、自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほどいや増戀の種となり、一倍いとしうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業とおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住吉で神酒と偽りコレ此鮑で勤めた酒は秘法の毒酒

癩病發する奇藥の力、中に隔をしかけの鈍子、私が吞だは常の酒、お前のお顔を見にくうして、淺姫香にあいそつかさせ、我身の戀を叶はふ爲、前世の惡業消滅と家出有しはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中も君が篋と此盃、肌身放さず抱しめて、いつか鮑の片思ひつれないわいなと御膝に身を投伏てくどき泣、様子を聞て俊徳丸、無念と思せど義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運の御落涙、姫はいつそ涙も出ず、腹立紛れ取て突退け、エ、聞ば聞く程餘りじやわいな、玉をのべたお姿をよふあの様に仕やつたなふ、母御の身として子に戀慕、人間とは思はねど道ならぬ事も程がある、サア元のお顔にして返しやと恨み餘つてはしたなさ、玉手はすつくと立上り、ヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊徳様いづくへなりと連退て戀の一念通さで置ふか邪魔しやつたら蹴殺すと、飛かゝつて俊徳の御手を取て引立る。ア、ヲ穢らはしと、ふり切るを放れじやらじと追廻し、さゝへる。姫を踏のけ蹴退け、いかる目元は薄紅梅、逆立つ髪は青柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかねてかけ出る合邦、娘が誓引掴みぐつと差込氷の切先、あつと

魂消る聲に驚り戸をめりくかけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけてしかと御涙、娘をかへる母親は心からとは言ひながら、ヲ、術なかる苦しかると歎けば今更人々も涙くを添にける。合邦は怒りの顔色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナ、ナ、ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門様や俊徳様御夫婦へ心の義理が立まいがな、此様な念の入た大悪人をまだおのりや子じやと思ふか、おりやもふく憎ふてくどふもかうもたまらぬわい、十年以來蚤一疋殺さぬ手で、現在の子を殺すも浮世の義理とは言ひながら、是が坊主の有ふ事かい、コリヤヤイコリヤ、おのれ計りか此親まで佛の教を背かして、無限地獄の釜こげにようしをつたなア魔王めと抉る拳を手負は押へ、ヲ、道理でござんす、道理じや、憎い筈じやが是には深い様子のある事、物語るうち此刀必ず抜て下さんすなと苦しき息をほつとつぎ、様子といふは外でもなく、外戚腹の次郎丸様、年かきに生れながら後に生れた俊徳様に家督を繼すを無念に思ひ、壺井平馬と心を合し、御世繼の俊徳様殺さふといふかねての巧み、推量ばかりか委しい様子立開してなむ三寶、義理ある中の御子と言ひ、元は主人の若殿様、殺させて

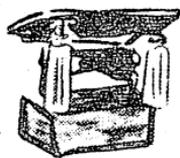
は道立たず、此上は俊徳様御家督さへお繼なくば次郎丸様の悪心も自然と止でお命に別條ないと思案を極め、心にもない不義徒いふもうるさや穢ららしい妹春のかためと毒酒をすゝめ、難病に苦しめたはお命助けふばかりの手便、戀でないとの言譯は身をも放さぬコレ此盃、繼母の心子は知らぬ片思ひといふ心の誓ひ、繼母繼子の義は立ても無や我夫通俊様、根が賤しい女故、見損ふた徒者とおさげしきみを受けるのが黄泉の障りになるはいのと、いへど合邦嘲笑ひ、ハ、ハ、ハ、ハ、夫程しれた次郎丸が悪事なげ通俊様へ告げぬぞい、たつた一口言ひさへすりや癩病にする事も不義者にもならぬわい、口利巧に言廻した連今になつてそんなくらしい言譯くふ様な親じやないわい、イエ〜そりやと、様の御了簡違ひ、其様子を夫へ告なば道理正しい左衛門様お怒りあつて次郎丸様切腹かお手討は知れた事、次郎丸様も通俊様も私が爲には同じ繼子義理ある中にかはりはない、悪人なれど殺しては先立しやんした母御前が草葉の蔭でも無や歎、隔てた仲故訴人して殺したかと思はれては世間も立ず、通俊様もお子の事何の心よからふぞ、あなたこそなを思ひやり、繼子二人の命をば我身一つに引受て、不義者と言はれ悪人になつ

て身を果すが繼子大切夫の御恩せめて報ずる百歩一と言譯聞て人々は、扱はそうかと疑ひの晴る程、猶父親はムウコリヤ娘其心でなげに又俊徳様の後追て家出したが合點がいかなぬはい、ヲ、尤なお咎なれど、何國迄も行衛を尋ねあなたのお目に懸らねば、いたはしやあの癩病御本腹はござんせぬと、聞て入平不審顔、フウ何とおつしやるお前様がお傍に付てござれば御本腹なさるゝとは、さればの事、典藥法眼に様子を打明毒酒の調合頼む折から本腹の治法委しく尋ねしに、胎内より受たる癩病ならず毒にて發する病なれば、寅の年、寅の月、寅の日、寅の刻に誕生したる女の肝の臓の生血を取り、毒酒を盛たる器にて病人に與へる時は即座に本腹疑ひなしと聞た時の其嬉しさ、それで〜此盃身に添持て御行衛尋ねきかす心の割符と、様何と疑ひは晴ましてムんすかへ、ヲイヤ〜そんなら何かそちが生れ月日が妙薬に合た故一旦は癩病にしてお命助け、又身を捨て本腹さそふと夫で毒酒を進ぜたな、アイ、ヘエ出かしおつた、出かした〜娘、コリヤやい娘モ、ハ、何にも言はぬ堪忍してくれ〜日本は扱置、唐にも天竺にも今一人とくらべる人もない貞女を畜生の悪人のと憎て口いふ計りか親の手に

かけむごい最期もコ、此おれがぐどんなからぢや、あほ  
うなからぢや、赦してくれとどふと居て悔み涙ぞ道理な  
る、始終を聞て俊徳丸探り寄て繼母の手を取押戴きく  
なさぬ仲の義を重んじ御身を捨ての御慈愛、誠の親共命  
の親言ふにもつきぬ御厚恩身を千百に碎く共何と報じつ  
くすべき有難や忝けなやと頭を疊に付け賜へば、其お心  
とは露知らず勿體ない道知らずとさげすんだのが恐ろし  
いお赦しなされて下さりませと兩手を合す姫の詫、適女  
の鑑とも言るゝお身に悪名付かゝる御最期いたはしやと  
入平も悲歎の涙、母は正體涙にくれ、ほんにこの子が生  
れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、世間へ沙汰をせぬ物  
と世の教をば大事ぞと夫婦親子の其外は、犬猫にさへ隠  
したに義理にせまれば我と我身を責はたる無常の虎ひよ  
んな月日に生れたは持て生れた不運かと歎けば道理と一  
座の涙、あふ坂増井の名水に龍骨車かけし如くなり、手  
負は聲をふり上げてサアくくと様コレ此鳩尾を切りさ  
いて肝の臓の生血を取此鮑で早ふくと氣をいる娘、エ  
、憎いと思ふた張り合ひなりやこそ切も突もなつたもの  
今では眞底可愛い娘をどふマアそれが、むごたらしい

ヤ若役じや入平殿とやら大儀ながらたのみます、是は又  
迷惑千萬、主人の介抱お世話のお禮どんな御用も相勤ふ  
が御主人同然の玉手様どこへ刃が當られませう、これば  
つかりは御免く、エ、未練な用捨。もふ人頼みには及  
ばぬと、懐劍逆手に取直せば、マ、マ、待てくれ娘、と  
ても生ぬそちが命、臨終正念未來成佛力頼む百萬遍、  
此人數でくる珠數の輪の中へ往生せいと取々廣げる珠數  
の輪の中に玉手は氣丈の身構へ俊徳丸を膝元へ、右に懐  
劍左に盃、外には爺の親粒が、導師の役と鉦撞木、母は  
涙の目も明かず、宵は死だと思ひ子が回向の爲の百萬遍  
今又無事なと悦んだも露と消行く勤めの念佛、南無阿彌  
陀佛くくくくく、内には難なく切さく鳩尾自  
身に血汐うけたる盃、差付る手もわなくくく、俊徳丸  
は押戴き、母の賜物天地にも餘るばかりの御芳志と、只  
一口に呑干し賜へば、不思議や忽ち兩眼開け、面色手足も  
またく中、昔の姿に歸り咲、花の顔見る手負苦しき片  
頬に笑ひ顔、ヤア御本腹かと一座の悦び、早斷末魔の四  
苦八苦、鉦も早めて責念佛、なまいだくくくく、  
願以此功德平等に死骸に取付き纏り付、悲しみ涙添け涙

庭に波打つばかりなり、歎きの中に母親は、頭の雪をうちはらひ、娘が菩提の尼衣、俊徳君も涙をとゞめ、廣大無邊繼母の恩、せめて少しは報ずる爲出世の後は此邊に一字の寺院を建立し、母の尼公を住侶とせん、繼母は貞女の鑑とも曇らぬ心は清める江に月を宿せし操を直ぐに月光寺と號くべしと仰は今も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や残るらん、父は常々勸進の自力他力に此佛體建立して我住家を其儘一つの辻堂に營むも又平等利益、東門中心極樂へ娘を往生なし賜へと願ふ心は後世の爲、現世の名殘數々は百八煩惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬と僅に残る盆の逆様事も善知識佛法最初の天王寺西門通り一筋に玉手の水や合邦が辻と古跡をとゞめけり。



## 出版豫告

序文 豊竹古靱太夫  
齋藤清二郎著

## 文樂かしらの研究

内容 四六倍判

精巧寫眞版 百四十頁  
原色版 六葉  
本文記事 百頁  
定價 未定

文樂かしらに關する貴重なる我邦最初の文獻  
三月刊行豫定

發行所 東京アトリエ社

●豫約御申込は文樂座賣店へ●



## 御 挨拶

大東亞戦争の赫々たる武威を讃へつゝ、一方には幾多殉忠の英靈に對して唯々感謝感激の涙に浸るばかりでございます。就きましては此度開戦以來の御英靈に謝するの一端として、謹んで新作曲を構成し、皆様と共に御在世の頃の壯烈なる御武勳の程を彷彿いたしたいと存じまして、此度「忠靈」一曲を特に上演いたします次第でございます。

曲は誠に微弱ではございますが、出演諸氏の誠意のありますところを御諒察くださいませ。よろしく御觀覽の程を御願申上げます。

昭和十七年三月

白井松次郎

## 中部軍報道部御後援

觀世委員會原作 山村若子 振舞臺裝演  
西亭 脚色並作曲 大塚克三 舞臺裝演  
陸軍記念日に因みて 村田芳生 舞臺照明

忠

靈

「我が日の本に生れ来て、我が日の本に生れ来て恵みを受くる嬉しさよ、もとよりも治に居て亂を忘れずの治にて亂を忘れずの戒め肝に銘じつつ御楯と散りし忠靈に拜を捧ぐる旅衣。」

國士「これは何某と申す者にて候、我れ靖國の御柱忠靈の御徳朝暮湯仰仕り候。」

國士「さる程に此處彼處を廻り候程にこれは忠靈塔の御前に來りて候、心靜かに禮拜致さば」と存じ候。

「忝くも國の爲華と散りにし忠靈は尊き御業なるとかや、八紘宇と爲さばや大君の御楯の徳を仰くなり誠の精神顯せば天も感應ましまして、自づから春の手向の櫻花、秋はまた紅の葉毎に飾る錦こそ皇國の旗の靡くなれ豊年願ふ天地の四季折々の捧物數にもあらぬ我等まで日毎に仕へ奉る、日毎に仕へ奉る。」

國士へいかにこれなる人に申すべき事の候、見申せば貴

賤の男女夥しく勤勞奉仕の群集の中にとりわき親子と

思しき二人の者一入殊勝に候。

老翁へ御言葉忝く候、さり乍ら神の御前の勤勞に老若男

女のあるべけれ、それ國の爲家の爲、何れ勝りの疑ひ

ぞや、先づ公を先とせん、君が代の御影を仰ぐ蒼生の

盡す姿は色々に軍の場に立つも立たたぬもの御教へ實

に有難や山田守る老も若きも勇みあひ銃後圓滿に榮え

行く力の程ぞ頼もしき。

國士へ實に頼もしき御事なれども花と散りにし忠靈の御

心如何おはすらん。

老翁へさればこの所に納る忠靈には親子もあり兄弟もあ

り遺兒次ぎ／＼に大君の御楯となりし者もあり。

國士へげにや七度生れて國に報ふの御志。

老翁へいやとよ七度に限るべからず生じては死し死して

は生じ。

國士へ親より子、子より孫。

老翁へ子々孫々の幾千代までも。

二人へ國を護りの御誓ひ。

へそれ人間の一生は、電光朝露百年の榮華も夢の中ぞ

かしかけまくも大君の詔勅に召し出され忝くも赤子と

して股肱の勤め功名に最期を飾るぞ光榮なれ、其の上

靖國と齋はれて無上の榮に浴したり。

國士へ不思議なりとよ靖國の神の御心木綿幣の御身いか

なる人やらん。

老翁へ人か神かは白眞弓弦を放れて飛ぶ空の彌猛の心靖

國の神の社頭に夜もすがら語り申さんいざ去らば、と

言ふかと思れば、幻の夢の如くになりけり夢の如く

になりけり。

へ夜も更け過ぎて東雲や、白む御空の明け近しと思ふ

雲間の中よりも、一道の光ほのかにて、げに神さぶる

氣色かな、實に神さぶる氣色かな。

へ四海波靜を謳ふ太平に、波瀾を立つるは何者ぞさて

も國難以ての外にて夷の寇を平げよ、急ぎ出陣あるべ

しと畏き仰蒙りて、畏き仰せ蒙りてかねて期したる將

兵等、皆一同に勇み立ち海路纒腫黑鐵の攻めつゝ征け

ばうち靡き、銀翼虚空に飛行して、轍轟く荒金の地軸  
 動搖す勢ひに、手に立つものもあらざれど、敵と戦ふ  
 其の上に金石鎔かす三伏や霜雪寒風骨を刺し、苦患甚  
 だ多くとも難きに堪ゆる我が將士、皇軍勝利の爲なら  
 ば、命捨つるはいと易し、いで一命を捧げんと大刀眞  
 向にさしかざし多勢が中に割つて入り、もとより好む  
 業物をおつとり延べて右左、切り立て切り伏せなぎ倒  
 し、鎧を鎧つて戦ひしが、武士の死所を得て海行かば  
 水漬く屍山行かば草むす屍大君の御代萬歳を唱へつゝ  
 花と散り行く靖國の神、すゞしめの御神樂ゆゝしき御  
 聲千早振るげに頼もしき神遊び。今ぞ治まる四海波靜  
 かに謠ひ舞の袖、御代萬歳と明け方の旭日輝き御旗の  
 八光外國までも靡かぬ草木もあらざる御代に君を護り  
 の國民絶えずゆるがぬ國こそ久しけれ、ゆるがぬ國こ  
 そ久しけれ。

## 文樂座小史（昭和十六年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十七年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎播時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始  
メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル



尼ケ崎の段

繪本太功記

尼ケ崎の段

人形役割

|   |   |   |   |   |   |   |   |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 軍 | 加 | 眞 | 母 | 妻 | 武 | 嫁 | 武 |  |
|   | 藤 | 柴 |   |   | 智 |   | 智 |  |
|   | 虎 | さ |   |   | 初 |   | 重 |  |
|   | 之 | つ |   |   | 光 |   | 次 |  |
| 兵 | 助 | き | 操 | 秀 | 菊 | 郎 |   |  |
|   |   | 吉 |   |   |   |   |   |  |
| 大 | 桐 | 桐 | 吉 | 桐 | 吉 | 吉 | 吉 |  |
|   | 竹 | 竹 | 田 | 竹 | 田 | 田 | 田 |  |
| ぜ | 門 | 政 | 小 | 紋 | 榮 | 光 | 光 |  |
|   | 次 | 龜 | 兵 | 十 | 玉 | 之 | 之 |  |
| い |   |   | 吉 | 郎 | 藏 | 郎 | 助 |  |

前 豊竹呂太夫  
 切 豊澤仙糸  
 竹本大隅太夫  
 鶴澤清次郎

寛政十一年七月十二日（二四五九）から大阪道頓堀豊竹若太夫の芝居に上演された。作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒。全曲十四段よりなり、第十段目（十日目）の夕顔棚の尼ケ崎の段が有名である。題材は明智光秀謀反の顛末を仕組んだもので「繪本太閤記」に據り脚色されてゐて、太閤秀吉に關する多くの戯曲中、最も世に知られたものである。尙、全十四段の構成は、所謂光秀の蘇鐵の諫言を發端にして、天正十年六月一日の安土城襲應の日の意趣から、本能寺の變となり、同じ十三日小栗柄に百姓の竹槍に哀れな最期を遂げるまでを十四冊に脚色してゐる。

梗概

父光秀との出陣を許された重次郎は、今宵決死のおもひを胸に秘め、母操に又祖母臯月に、生來



十八年の恩を謝せずには居られなかつた。  
それと察した許婚の初菊は、可憐にも重次郎に  
縋つて名残を惜しむのだつたが、重次郎はけなげ  
にも、所詮討死のおのれと別れ、他家へ縁づきす  
る様懇々と悟すのだつた。

しかし、初菊は乙女ごころの一筋に、どうして  
これが思ひあきらめられやう、せめて今宵は凱陣  
をと云ひさして後はたゞ涙涙であつた。

時刻が移ると、重次郎は初菊のかひ添へで緋お  
どしの鎧も凜々しく装ひ立つた。

臯月と操は、今出陣の門出と、銚子盃の用意を  
し、重次郎初菊に酌み交させたのだつたが、これ  
は祝言の盃であり、又今生の名残の盃でもあつ  
たのだ。臯月の心中にしてみれば、なまなか出陣  
の止めだてをして、主殺し光秀の子として、生き  
恥をかゝさうより、むしろ健氣な討死をさせた方  
がと、苦しい計らひだつたのである。

折柄聞える攻太鼓、重次郎は、さらば、と初菊

を振り捨て、まつしぐらに戰場へと馳せ参じて行つた。

この様子をそつと伺ひ見た最前この家に宿をとつた旅僧は、さり氣なく、風呂の案内をするのだつたが、まあお先へと云はれるまゝに、又湯殿口へ入つた。涙を押しかくした老母、操、初菊の三人も奥へしばしと立つて行つた。

あとは遠近に鳴きしきる蛙の聲ばかり、その中を拔足さし足忍びよる簑笠をつけた武士。それは武智光秀であつた。最前この家に入ると見たのは僧形に身をやつしては居るもの、正しく敵將眞柴久吉だつた。必定久吉この内と、門前の青竹をひつそいで竹槍を作つた。そして一と間に聞えるもの音、こゝぞと突込む槍先に、わつと叫んだのは眞柴にあらぬ老母臯月だつた。餘りのことに光秀も茫然とした。この騒ぎに操も初菊も奥からはしり出で、このあり様は何事と老母に取り縋つた。臯月は苦しい眼を開き、叛逆人のわが子光秀を

たゞ人非人と罵り、その天罰は親に報ひ、この通り青竹のひつそぎ槍で最期をとげるのだ、と氣丈にも熱涙を揮つた。

操は又夫光秀に、門出の折の諫言をくりかへしせめて母御の御最期に善心に立ちかへつて呉れ、と夫を思ふ誠の涙にむせたのであつた。

強情我慢の光秀は、どうしてこれを受けつけやう。悪逆無道の小田春永を亡ぼすは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、と聲あらゝげて諫言を阻んだ。

その折しも表口から刀を杖に、早くも手負の重次郎はよろめき／＼立ち歸つて、斷末魔の苦しい息を吐くのだつた。光秀は、わざと荒々しく、戰場の仔細を尋ねると、味方は久吉の家臣、加藤清正勢に追ひ立てられ負け戦、四方天但馬頭は行方知らず、と云ふのである。さう云ふ中にも早致死期の老母と重次郎、初菊も操も身もだへして悲んだ。

流石の光秀も、これにはこらへかね、はらくと落涙するのであつた。

又もや聞ゆる劇しい人馬の物音に、光秀は物見へ上つて見廻すと、一面の千生瓢の旗印、さては久吉攻め寄せ來ると齒嚙みをする折、眞柴筑前守久吉對面せん、と奥より聲をかけたのは、以前の僧形とは打つて變つた武裝の久吉だつた。久吉は山崎にて時を移さず雌雄を決せんと立ち去らうとするので、光秀も、首を洗つて觀念せよ、と互に敵味方睨み合ひつゝ別れたのであつた。

### (佐和利) 尼ヶ崎の段

歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を害せし武智が一類、かくなりはつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者とも悪人とも、たとへがたき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて功名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にもおとりじとはしらざるか、主に背かず親に仕へ、仁義忠

孝の道さへ立たば、もつそう飯の切米も、百萬石に増るぞや、おのれが心唯一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を斷つ刃も多いにこのやうな、ひつそぎ竹の猪突槍、主を殺した天罰の、報ひは親にも此通りと、槍の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り、これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれぐも、お諫め申した其時に、思ひ留つて給はらば、かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すと云ふはエ、マア何事ぞいの、せめて母御の御最期に、善心に立かへると、たつた一言、聞かしてたべ、拜むわいの、と手を合はせ、諫めつ泣きつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鏡曇りなき、涙に誠あらはせり。

# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由来——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七十八年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピツタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりて、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」  
(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

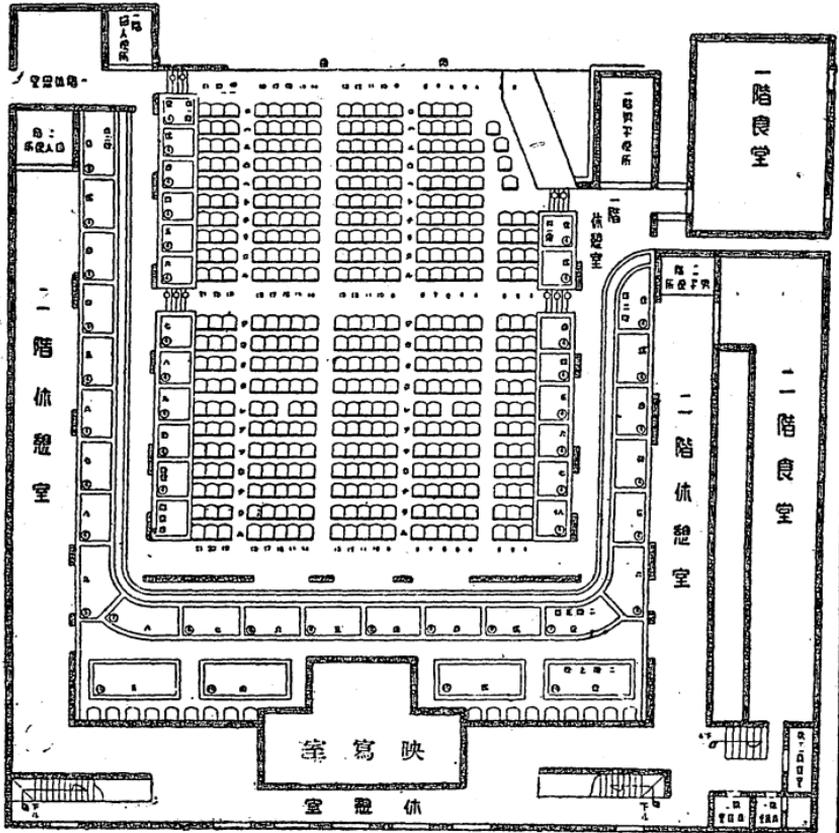
臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

# 文樂座御場席案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますから一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座ります。

切符賣場。右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

# 三月の芝居御案内

| 川湊戸神<br><b>場劇竹松</b><br>四〇四四川湊話電                                         | 條四都京<br><b>座南</b><br>五五一一園話電                                          | 堀頓道<br><b>座角</b><br>二一二二南話電                                                     | 堀頓道<br><b>座中</b><br>九七二一南話電                                                     | 阪大<br><b>座伎舞歌</b><br>六二八二戎話電                                                            |
|-------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 日初日一<br>開二午正晝<br>演部時五夜                                                  | 日初日一<br>開二午正晝<br>演回時五夜                                                | 日初日一<br>開二午正晝<br>演回時五夜                                                          | 日初日一<br>開二午正晝<br>演部時五夜                                                          | 日初日一<br>開二午正晝<br>演部時五夜                                                                  |
| <b>新東京大歌舞伎<br/>                     銳劇團</b>                             | <b>松竹家庭劇</b>                                                          | <b>厚生劇</b>                                                                      | <b>祝捷大歌舞伎</b>                                                                   | <b>西東合同大歌舞伎</b>                                                                         |
| 壽式三番叟<br>木ノ邊山<br>九郎鳥                                                    | 第一 市松爺<br>第二 青春温泉<br>第三 愉しき勤<br>第四 泣き顔と笑ひ顔                            | 第一 牝舞踊劇<br>第二 夕雀<br>第三 夕雀<br>第四 續五代友厚                                           | 夜討會我狩場曙<br>茶筌寶と小原女<br>天野屋利兵衛亂<br>藻野前囃                                           | 開の夏狂亂羽<br>二條城の清正<br>傾城反魂香                                                               |
| 管原傳授手習鑑<br>隨市川鳴神會我<br>佐々木高綱<br>黒掛時次郎                                    | (晝の部)<br>(夜の部)                                                        | (晝の部)<br>(夜の部)                                                                  | (晝の部)<br>(夜の部)                                                                  | (晝の部)<br>(夜の部)                                                                          |
| 一等席 三圓<br>二等席 一圓<br>三等席 一圓<br>四等席 一圓<br>五等席 八圓<br>一部観劇料<br>三圓<br>(入場税別) | 一等席 二圓<br>二等席 一圓<br>三等席 一圓<br>四等席 一圓<br>五等席 一圓<br>観劇料<br>一圓<br>(入場税別) | 特等席 二圓<br>一等席 一圓<br>二等席 一圓<br>三等席 一圓<br>四等席 一圓<br>五等席 一圓<br>観劇料<br>一圓<br>(入場税別) | 特等席 二圓<br>一等席 一圓<br>二等席 一圓<br>三等席 一圓<br>四等席 一圓<br>五等席 一圓<br>観劇料<br>一圓<br>(入場税別) | 櫻席 六圓<br>菊席 九圓<br>一等席 一圓<br>二等席 一圓<br>三等席 一圓<br>四等席 一圓<br>五等席 一圓<br>観劇料<br>一圓<br>(入場税別) |

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

## 當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である

## 文樂座人形淨瑠璃は

常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

## 御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

## 貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

## お煙草は

一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

## お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

## 賣店

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

## お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

二階に御座ります。

## 場内にて

寫眞撮影は絶對にお断り致します。

## 御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御中附け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから豫め御諒承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第登土、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年 二月廿八日印刷

大阪市南區久左衛門町八番地  
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪府南區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店內  
發行所 鳥江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二  
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

